

●日本漢方の歴史に新しいページを開く！

経方医学

『傷寒・金匱』の理論と処方解説

江部洋一郎・横田静夫著

- 漢方の世界で、これほど人を魅了する衝撃的な本があったであろうか？
- 独創性に溢れるダイナミックな循環学説！
- 『傷寒論』の生理から病理・処方・薬物まで全体系を解明する！



- 大胆な構想、緻密な論理性、驚くばかりの迫力、読み出したら止まらなくなる面白さ。頁を繰るごとに新しい発見がある。
- 「冷え」という現象に疑問を抱いたことから始まる謎解きの旅。20年を経てついに『傷寒論』の奥底に流れるダイナミックな循環構造を描き出す。全く新しい視点から、『傷寒論』の生理・病理・処方・薬物の体系を解明。
- 日本人が初めて作り上げたオリジナルな漢方医学体系。日本漢方・中医学の伝統を踏まえながら、より深化・発展させた画期的な理論体系である。もともと伝統医学は諸学説を統合したものであり、論理の矛盾性と複雑性は宿命である。だが、江部経方理論の出現によって、それは快刀乱麻のように鮮やかに解きほぐされてゆく。本書は様々な議論を引き起こすだろうが、これによって漢方医学はかつてない活性化の時代を迎えるだろう。

◎本書は今回を第1集としておいおいに続編が発行されます。ご期待ください。

A5判 228頁 定価：本体 4,000円＋税（送料 300円）

話題沸騰！
漢方家必読書

ご注文は FAX専用フリーダイヤルで 今すぐにFAX 0120-727-060

〒272 千葉県市川市宮久保
3-1-5

東洋学術出版社

電話 (047) 371-8337
FAX 0120-727-060

【主な目次】

緒論 経方医学の出発点

傷寒論の成立について
傷寒論と内経の関係
傷寒雑病論の系譜
薬用量に関する問題
経方のための本草書
方証相対について

総論

人体の構造と機能

冷えからみた経方的生理構造
気について
気の構成
気の流れ
人体構造の概観
外殻の構造
[皮][肌][腠理][膜]
胸・膈・心下の役割
臓腑の生理
[胃と脾][守胃機能][肺][胆と肝]
[小腸]
◆ 表裏・陰陽・内外の概念

気の流れ

外殻における衛気
衛気の種類
衛気の循環
1. 後通の衛気
2. 前通の衛気
3. 脈外の衛気および脈中の血
4. 肌中の衛気
◆ 胃気の頭部・顔面部への直達路
小柴胡湯証の病理

気の病理

悪風・悪寒 発熱 邪正闘争 汗
◆ 経方的な邪の伝変
脈の遅数 脈の浮沈

腹診

腹診図
季肋部 心下部 脇腹 腹直筋
腹診による治療法

処方解説

桂枝湯

桂枝湯証の総論

風邪の存在する桂枝湯証
[陽浮陰弱][自汗][悪風・悪寒][発熱]

◆ 風邪の伝変 ◆ 胃気の上昇
[脈浮緩]

風邪の存在しない桂枝湯証
[営衛不和]

無汗の桂枝湯証

桂枝湯の条文解説

◆ 胃気の頭顔部への直達路
◆ 胃中の痰熱 ◆ 身疼痛
◆ 傷寒論と臟腑弁証
◆ 太陽病と霍乱病の違い
◆ 温病学説 ◆ 太陽病と少陰病

桂枝湯 補足とまとめ
[脈][自汗][中風][悪風・悪寒][発熱]

◆ 邪正闘争における胃気の鼓舞

桂枝湯の構成

[桂枝]
◆ 麻痺・疼痛・腫脹
[芍薬]
[大棗]
[生姜]
◆ 補腎に対する経方の考え方
[甘草]
甘草の守胃作用
亡陽——四逆湯類
伏陽——乾姜附子湯類

四逆湯類

四逆湯 四逆加人参湯
茯苓四逆湯
通脈四逆湯
通脈四逆加猪胆汁湯

乾姜附子湯類

乾姜附子湯
白通湯・白通加猪胆汁湯

甘草乾姜湯・芍薬甘草湯・芍薬甘草附子湯

◆ 広義の傷寒・狭義の傷寒
甘草乾姜湯 芍薬甘草附子湯

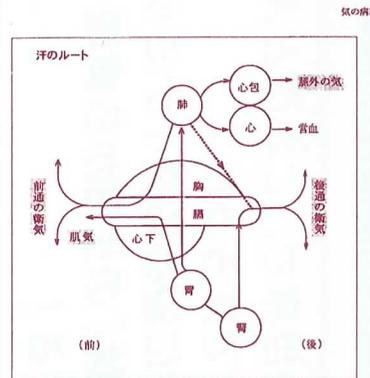
漢方医学の飛躍的發展を促す！

江部経方理論は二千年にわたる漢方医学の歴史に新しいページを開くものである。これまでとは全く異なった観点から人体の生命現象を見ているとはいえ、一般的な中国伝統医学理論と矛盾する存在ではない。我々は、この理論を得ることによって、漢方医学を新しい眼で眺め、より深く理解できるようにするであろう。そして本書の出現は、今後の漢方医学に飛躍的發展を促すことになるであろう。

安井 広迪

(本書「序」より)

図解でわかりやすく解説



表に多く、夜は裏に多く分布しているということです。つまり昼に陽分(外殻)に分布していた気は、夜になると陰分(裏)に帰って来ます。例えば守胃機能に一定の失調がある場合、夜間、胃に帰って来る気が、その守胃能力に対して過剰になれば、陽分(外殻)へと溢れ出て寝汗となります。また胃の固摂機能に一定の失調がある場合にも、夜間、胃に帰って来る気が、その固摂能力を超えていけば、やはり陽分(外殻)へと溢れ出て寝汗となるのです。「内経」では五臓はすべて汗をかくといわれていますが、汗に関わる基本的な臓腑は胃、腎そして心包です。

◆ 経方的な邪の伝変について

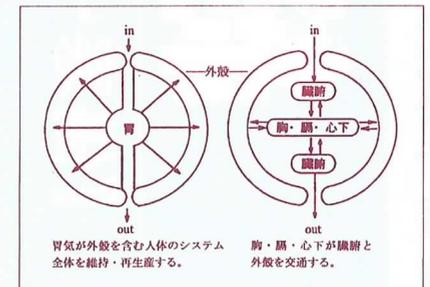
ここで、病邪の伝変について述べておきます。病邪は皮・肌、つまり外殻(外側)から侵入する場合と、口や鼻から

裏に帰っていく衛気で、脈外の衛気とは異なるものだと考えてください。

人体構造の概観

人体というシステムは外殻と呼ばれるものによって覆われており、環境から区別されています。外殻の内部には臓腑と呼ばれる機能的な装置があり、外界からの取り込み、外界への排出を含む気の産生と循環の過程を担っています。内部で産生された気は胸・膈・心下と呼ばれる構造物を介して外殻へ供給されていますが、この胸・膈・心下は内部と外殻を交通し、気の昇降・出入の扉のような役割を果たしています。

他方、気から転換される血は血脈という閉鎖循環系を無駄なく効率的に流れています。これらの気・血の産生と循環がスムーズに行われることで、人体というシステムは維持・再生産されているわけです。



一般的に「肝腎かなめ」という言葉があるくらい、中医学ではとりわけ五臓を中心とした治療が重視されています。ところが、『傷寒論』や『金匱要略』を読むと、病が五臓に入ってしまうとなかなか治らないと書いて